

日本

# ハンザキ研究所ニュース 2011(12) : 通巻 No. 72



発行2011年12月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## ヘルベンダー（アメリカ・オオサンショウウオ）

アメリカのハンザキは属名が日本や中国産の種と異なっている。サイズも全長74㎝が最大記録と言われているので、日本産の半分ほどにしかない。一頃はペットとして日本にも輸入されていたが、絶滅が心配される状況となり輸入はストップとなった。昨年6月に4人のアメリカ人が中国でのワーワーユウ（中国ハンザキ）・シンポジウムに参加した後、日本各地を回ってハンザキの繁殖や調査について情報を集めて帰っていった。その効果が現れたと言うニュースが入った。ハンザキ研に来た時に、私が40年近い間に工夫してきた調査道具の色々な関心を示していたが、早速役に立ったようだ。繁殖を確認するために卵を引っ掛けてサンプリングする道具（当ニュースNo.70、写真6参照）である。パイプの先に針金のフックを付けただけの物であるが、ミズーリ州で初めてとなる4河川で9か所ほどの産卵巣穴を確認できたそうである（写真5）。



卵を守るヘルベンダー（ティム氏より）

この道具は“トチモト・フッカー”として登録された（どこへ?）。単に棒の先に針金のフックを付けただけのものなのだが。こんなことも考え付かなかったのかとも思うが、これが“コロンブスの卵”と言うことなのだろう。もう一つの朗報は、飼育下での繁殖にも成功したと言う。それも、より絶滅の心配の大きい亜種のオザーク・ヘルベンダー（基亜種はイースタン・ヘルベンダー）だそうである。セントルイス動物園での飼育施設では、これまでは産卵はするものの孵化に至っていなかったというが、視察した広島市安佐動物公園の繁殖施設が参考になったのであろうか。いずれにしても目出度いことである。

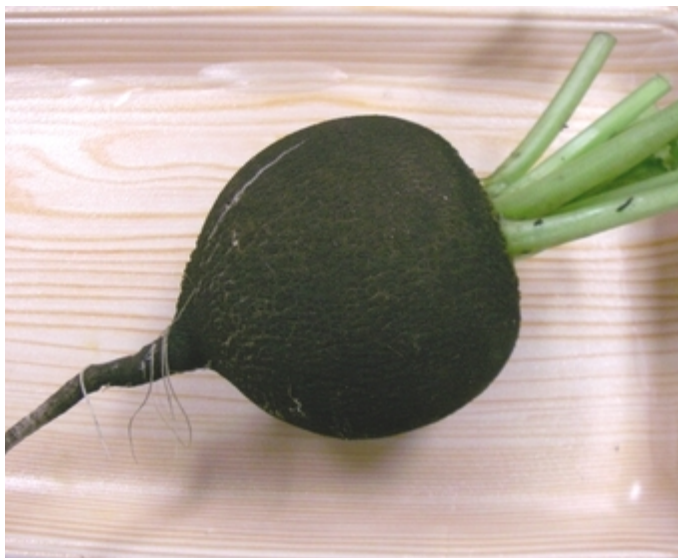


写真1 黒皮ダイコン



写真2 黒皮ダイコンの漬物



写真3 黒皮ダイコンおろし (右)



写真4 ハンザキのリュック



写真5 フッキングされたヘルペンダーの卵  
(ティム氏より)



写真6 シロサイの角  
(ジョージ・ヒューズ博士資料より)



写真7 巣にぶら下がったまま死んでいたジョロウグモ



写真8 ノウサギの足跡



写真9 落ち葉よけ・波消しリングの工夫



写真10 改良型リング



写真11 ガードレールの裏側の塗装



写真12 雪重で防鳥ネットの危機

## スマスイ ファウナ・カフェ

神戸市立須磨海浜水族園の指定管理者が変更になってから 2 年、結構外国からの研究者を招いての講演会が目につく。先月 16 日は、ちょうど良いタイミングに下界での用事ができて下山することになっていたので参加してみた。講師は南アフリカ共和国のジョージ・ヒューズ博士（スコットランド生まれ）、タイトルは「南アフリカにおける自然保護の 100 年の歩み」である。

内容は、ちょっと予想とは大きく外れて中々生々しい物もあった。肉屋に置いていない動物の肉は無いというショッキングな話である。キリンの丸焼きなんてのもあるそうだ。さらに、世界中の動物園に増えた野生動物を売りまくって動物保護の資金にしているとのことである。何しろ守備範囲が広いのでヘリコプターなどを使っての活動は、多大な資金が必要であることと、増えすぎた動物は適当に人間がコントロールしないと植物を食い尽くしてしまったりするのである。キリンは絶滅させてしまったが、今や 15 万頭にまで増えたと言う。一体何頭を移入したのかと言うことと血縁的な問題が発生しないのかと質問してみた。血縁的な問題はオーバーに考えられすぎていると言う回答と、最初は 4 頭だが増えた分を国外からの新しいキリンと取り替えつつ増やしてきたとのことだった。魚類では突然変異の出た個体同士を掛け合わせてキンギョの新しい品種を固定してきたなどと言う歴史もあるが、哺乳類では問題があるのではないだろうか？

シロサイも順調に増えていると言う話だったが、数十頭の群で飼育したのが成功の元だという。シロサイを数十頭も購入するには大変な資金が必要になるだろう。日本の動物園ではそんな数を収容する広さの囲いはサファリにしかないがどこかで挑戦してほしい話だ。それは 1 匹もの素晴らしい長さの角を持ったサイの映像（写真 6）を見せられたからでもある。私は動物園をそんなに多く見ているわけではないが、ストレスからかコンクリートの壁に角をこすりつけて磨り減ってしまった情けないサイの姿が目につかぶからだ。

ジョージさんは IUCN（国際自然保護連合）の名誉顧問（ウミガメ担当）でもあり、オサガメやアカウミガメの映像も出てきたが、アカウミガメの甲羅には驚いた。まるでベッコウ（タイマイの甲羅）のようだったのだ。私が見てきたアカウミガメと言えば甲羅には海藻を始めとしてカメフジツボ、イソギンチャクなどが所狭しとばかりに着生して一つの世界を形成している。甲羅を形成している鱗（甲板）も見えないくらいの個体もいた。それが南アフリカのアカウミガメは映像の個体だけでなく、全てがピカピカなのだそうである。水族園のウミガメ園長さんも初めて見たとのコメントを寄せられていた。

とにかく、日本とは異なり広い国土で大型の哺乳類を相手の自然保護活動はスケールが違うなどという感じを受けた。観光客の誘致にも力を入れているとのこと、その収入も自然保護に役立っている由だ。自然環境を壊さないような観察舎を兼ねたホテルが有るからどうぞ来てくださいとのことである。波の大水槽を横に見つつビールを片手の 2 時間、中々良い企画だった。

## ハンザキ研ヒト往来②

### 喜田 啓史先生のこと

喜田先生は、ある日突然にハンザキ研にやって来られた。飄々とした雰囲気ですりより一回りほど上の年齢とお見かけしたが、医者をお早々に辞め悠々自適の余生を送っておられるということだった。ハンザキ研には飛び込みの初対面の方が結構多く、何を目的にこられたのか分からない方も居られる。そのたびに作業を中断して対応してきた。しかし、余りにも多くの来訪者があって限界に来た所で、今年からは見学は予約をと言うメッセージを發したが、それも無視して多くの見学者があった。その日、喜田先生とは色々話をしたがコウノトリやトキには将来が無いが、ハンザキには希望があると思われた。私の話からそのように感じられたようだ。今日は、持ち合わせが無いがとりあえずNPOの会員登録の手続きをして、帰宅してからも気が変わらなければ少々の寄附をしようとのことだった。数日後に10万円が振り込まれてきて驚かされた。お話しをしているうちに高校時代の同級生に荒賀忠一さん(元・京都大学白浜水族館)や奥野良之助さん(元・神戸市立須磨水族館から金沢大学)と言う、私にとっては水族館界の大先輩であるお二人の名前が出てきたので驚いた。

荒賀さんは京都大学の教官ながら水族館活動に一生をささげて大きな功績を残された。退官後は“晴釣雨読”をモットーにされて“魚の釣れないわけ”などユニークな著書を数多く書かれている。奥野さんは京大の理学部卒業と言うことで、水産学部ではないからと神戸市役所水産職の昇任試験は受けないと言っていたが、後に金沢大学に転出し“金沢城のヒキガエル”の研究で知られている。それ以前にも水族館の飼育係をしながら和歌山の海にスノーケルをくわえて一日中水面を漂いながら“磯魚の生態学”という名著を世に送り出し博士号を取得されたと言う。この奥野先生とは石川県で捕獲された“150㌘という大物ハンザキ”の記事(1973年7月13日朝日新聞青鉛筆)のコメントを巡り、私からの事実確認の手紙に対して「記憶が全く無く、いい加減なマスコミ対応をしていた旧悪が露見してしまった」という苦笑いの返事をいただいたことがあった。この個体は捕獲時のサイズが112㌘と言うことで、2006年の測定で135㌘と言う後日談もあった。金沢城のヒキガエルは今や絶滅してしまい、奥野さんも80歳と言う天寿を全うされた由である。ご冥福を祈ります。私は現役時代に水族館希望の若い人たちへ、奥野さんの“磯魚の生態学”と共に、宮地伝三郎さんの“淡水の動物誌”、内田恵太郎さんの“稚魚を求めて”の3名著を読むことを勧めてきたものである。

喜田先生はハンザキ研へ時々やっこられていたが、80歳になって車の免許を返上されたとのことで、一緒に飲んでいるつもりになってくれと、呑兵衛の私を見透かされて毎年末には高級ウィスキーを送ってきてくださる。なんの縁もなかった方との突然の出会いではあるが、大変に嬉しいことだ。ハンザキの保護活動へのご理解援助だけではなく、奥野・荒賀両水族館界の大先輩との交流へまで話が進み、世の中の狭いことを実感させられた。

## 黒「皮」大根を作ってみた

理事 黒田 哲郎

黒川は、夏の夜は 20℃前半まで温度が下がるくらい涼しく、冬はマイナス 10℃にも達する寒いところです。大根は冷涼な気候を好むと言われ、朝晩の寒暖の差が大きい黒川で作った大根は他とは違うおいしさであるため生野周辺では有名です。ただ作量も少なく地域外へ出荷もしていないため、そのおいしさを知る人が限られているのが残念なところです。

それはさておき、あまのじゃくな私は黒い色の皮をした大根があると聞き、黒川大根がイマイチ知れ渡っていないならば、ジャレで黒「皮」大根でも作ってみるかとかタネを購入してみました。ヨーロッパでは黒い皮の大根が一般的で、白い大根をほとんど見かけない、つまり大根と言えば黒い色をしているというのが常識の国もあるのだそうです。ちなみに黒皮大根といっても皮の表面が黒いだけで、中身は普通の大根同様、真っ白です。

黒皮大根は基本的には辛味大根なので、大根おろしが一般的な食べ方だが、煮たり炊いたりすると辛みが抜けて普通の大根と同じような食べ方ができるらしい。

まずはおろして食してみよう。普通の辛み大根だとぴりぴりとした辛みが強くヒーヒーと言いながら食べ、後口にいつまでも辛さが残るものですが、この黒皮大根のおろしだと強い刺激が無く、ほどよい辛さで食べやすい上に辛みがサラッと抜けていきとても爽やかな後口になる。肉や魚に合うのはもちろん豆腐や野菜に乗せてもいけるのです。

肉の登場が少ない我が家では、時おり「大根ステーキ」なるものが食卓に登場するのだが、この黒皮大根でも作ってみた。黒い皮付きのまま 1 cm ぐらいの輪切りにしてオイルをひいたフライパンに並べ、フタをして両面を薄いきつね色に焼く。仕上げは醤油系のドレッシングか焼き肉のたれをからめれば出来上がる。普通の大根で作っても「これが大根？」と思うぐらいしっかりしたメインディッシュになるのですが、黒皮大根はその上をいく美味しさになったのです。普通の大根にはないもちもちとした食感で食べ応えがあり、周りの黒い皮が香ばしく感じるというおまけ付きです。この食べ方はぜひとも試していただきたいと思います。

辛み大根といえ、白い色のものや赤い色のものが一般的。ですが調べてみると、青い辛み大根もあることが分かりました。来年はこれらを揃えて、辛み大根四色食べ比べセットを作ってみようと企んでいます。

ここまでえらそうに書いてきましたが、実は大根は私が栽培したのではないのです。忙しさにかまけてほったらかしにしていたタネを、見かねた妻が蒔いて育てておいてくれたのです。でもまあ、そんな訳で最近の私はどこかに変わった大根がないかと、畑ばかり見て歩いています。

**ハンザキ所長の補遺：**黒い皮のダイコンができましたと黒田理事が持参してきた物を見ると、全くの真っ黒、焼け焦げたかのような黒さだった。私は変わった物へすぐに飛びつく習性があるので喜んで挑戦した。写真 2・3 にあるように赤カブと共に浅漬けにしたり、おろしてみた。見た目にも食欲をそそる物だ、来年は大いに生産して名物にしてください。

## 今年の来訪者数

年	団体/人	公務	業務	スタッフ	報道	地域	予約	フリー	日直	栃本	総計
17	1/8	12	2	15	0	9	—	0		19	65
18	9/235	77	100	106	5	239	—	106	0	175	1,043
19	24/383	187	157	112	143	232	—	268	33	290	1,805
20	29/540	140	165	312	124	137	—	651	480	310	2,859
21	13/211	168	214	393	57	113	—	1,110	716	328	3,310
22	44/685	153	239	398	17	60	—	957	715	351	3,635
23	19/241	133	268	404	54	—	254	292	462	340	2,706

今年は見学を希望する方には予約を御願ひすることにした。その結果が見学者数に如実に表れていると思う。予約とフリーを合わせて 546 人になるが、ノーチェックのフリー見学者数が大幅に抜け落ちているので前年並みであると思っている。今年の統計では表の地域の方の数は、フリーに含ませてある。

私自身の滞在日数も 300 日を越えているが、生き物の飼育をしていると止むをえぬ状況だ。団体に対する勧誘をすれば来訪者は増加するだろうが、上下水道が完備していないのでどうぞどうぞと言うわけにもいかない。この素晴らしい自然に囲まれた廃校を、環境教育の拠点として整備するための最大の課題だと思う。NPO 法人の会員数も 300 名を超えて、想定以上の多くの人の支援をいただいている。何とかその声援にお答えしたいのだが、現実には中々厳しいものがある。

.....

## 今年の十大ニュース

- ・ 但陽信用金庫からの支援約 7 倍に増額 (5 年間の実績が認められ、嬉しいことだ！)
- ・ 中古 1 トントラック購入 (スタッフの軽トラ借用に限界)
- ・ 作業ボランティア公募 (私の体力に限界)
- ・ 見学の予約制 (私一人での対応の限界)
- ・ チュウゴク・ハンザキの正式収容決定 (文化庁・京都市)
- ・ 生野ダム下流工事竣工によりハンザキ 83 個体原状復帰 (追跡調査の結果は?)
- ・ 小型水中カメラ購入 (これからは趣味の覗き見ができるぞ！)
- ・ ハンザキのぼり作成 (大人気、私も大いにお気に入りです)
- ・ ハンザキ保護センター 3 日間ポンプ止まる (本当に危機一髪だった)
- ・ キノコ観察会マツタケ・フィーバー (アイディアだったが、再考を)

この他にも色々候補も有ったのだが、自然観察会というものは自然保護と破壊、危険との紙一重のことでもあることが改めて考えさせられたことも有った。

## ハンザキ研日誌

2011年12月

- 3日 ・ 事務局会議 6 名出席
  - ・ 黒川地域活性化協議会について最終会議、Rireg の門上理事長他
  - ・ 神戸市立須磨海浜水族園、大鹿氏他 1 名視察に来所
  - ・ 鳥取大学 (院) 吉田博一氏など魚ヶ滝付近で夜間調査、17 個体測定
- 5日 ミニ・アクアリウム外水槽 6 ケース冬季収納 (氷で割れるのです)
- 9日 初積雪 5 ㍉、生野の街中には雪が無かった
- 10日 ・ 最後のイベント “ハンザキ研究所を上から眺めよう！” は積雪のため中止
  - ・ 積雪のため防鳥ネット大破 (網糸に雪が積もるのです 写真 12)
  - ・ 真っ黒い皮のダイコン受贈 (写真 1・2・3)
- 11日 上水配管を凍結させてしまい？復旧に一日かかった
- 12日 ・ 加古川漁協、梨木組合長他 3 名来所、運営について相談あり
  - ・ 愛晃教育新聞社・大浦氏取材に来所
- 14日 資材調達、ウナギ・モンドリなど購入
- 15日 モニターに写りこむガードレールの裏側の塗装完了 (写真 11)
- 16日 円山川水系自然再生推進委員会開催、豊岡市民会館にて
- 17日 神河町成人ゼミナール、同町中央公民館にて講演、約 40 名
- 20日 来年のカレンダー刊行
- 21日 国交省姫路河川国道事務所より揖保川水系流域委員会の件で来所
- 22日 兵庫県養父土木事務所より、管内の小規模河川工事の件で来所
- 24日 ・ 上水道のポンプ止まる、インペラ不良でポンプ取替え
  - ・ カモガワ・ハンザキの全測定終了、京大・服部氏他
- 25日 積雪 50 ㍉、雪掻きの日
- 29日 ハンザキ・リュックが銀谷工房より届く、少々恥ずかしいが・・・ (写真 4)
- 31日 6 年連続で越年

.....

### ハンザキ所長のツブヤ記録

2011 年が終わった、早いものだとつくづく考えさせられる。この一年の間には色々のできごとがあったが、とにかく無事に全てのイベントも終了した。・・・と 12 月号には例年どおりのコメントになってしまう。山の中で雪に埋もれての越年も毎年のことだが、下山しても正月はテレビを見てゴロゴロするだけなのだから。ハンザキ研にいと雪掻きだけでなく、屋根の雪下ろしや防鳥ネットに積もる雪も放って置くと重みで網が破れたりするので、あれやこれやとケアをするのに追われる。小型の除雪機があるのだが、残念ながら腕力が無くなって起動させることができない。かくして、300 ㍉ほどのパトロール道だけは自力で掻かねばならないので大汗をかきます。